

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520545

研究課題名(和文) 日英語対照による語形成のメカニズムと音韻構造に関する研究

研究課題名(英文) Contrastive Research on the Mechanisms of Word-formation and Phonological Structures in English and Japanese

研究代表者

太田 聡(OHTA, Satoshi)

山口大学・人文学部・教授

研究者番号：40194162

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日英語の語形成のメカニズムについて、特に音変化やアクセント移動に注目しながら、論じた。扱ったテーマは、複合語の一見不規則なアクセントパターン、日本語の複合語に見られる連濁とアクセントの関係、短縮語形成に係る原則、派生接辞が引き起こすアクセント移動、通常よりも長い混成語が作られる条件、などであった。そして、短縮語形成と混成語形成に関しては、日英語に共通した原則を明らかにした。また、複合語のアクセントと連濁については、統計的手法を用いて詳述し、従来の研究の不備を補った。さらに、派生語に関しては、日英語の名詞形成接尾辞の振る舞いの違いに着目し、脳内の辞書の構成に関する新しい提案を行った。

研究成果の概要(英文)：In this research, I have discussed word-formation mechanisms in English and Japanese focusing on sound changes and accent shift. Topics that have been dealt with include i) the apparently irregular accent patterns of compound words, ii) the interrelationship between accent and rendaku (sequential voicing) in Japanese compounds, iii) principles for forming clipped words, iv) accent shift caused by several kinds of derivational suffixes, v) conditions on forming phonologically longer blends than usual. For clipped-word formation and blend formation, I have pointed out the principles common to English and Japanese. For accentuation and rendaku phenomena in compounds, I have gone into considerable detail statistically, and have clarified some aspects which were vague in previous studies. Moreover, for derivation, through the examination of noun-forming suffixes especially, I have proposed a new organization of the so-called mental lexicon.

研究分野：日英語比較音韻論・形態論

キーワード：複合語 連濁 アクセント 略語 混成語 派生語

1. 研究開始当初の背景

(1) 複合語のアクセントは、通常、英語では前半要素に、日本語では後半要素に置かれることが知られている。ところが、日本語の複合名詞の中には、前半要素にアクセントを持つものや、全体が平板式アクセント(無アクセント)になる例もかなりある。この一見不規則なパターンが生じる理由を解明する必要があった。また、日本語の複合語に見られる連濁も、どのような場合に起こるのか・起こらないのかという点に関して不明なことが多いので、より詳しく検討してみる価値があった。

(2) 名詞を形成する接辞である日本語の「さ」と「み」を比べると、「さ」の方が広く用いられ、「み」は限られた語にしか付加されない。同じように、英語の-nessと-ityの間にも生産性の違いがあって、-nessのつく語の方が多い。そこで、「さ」は-nessに相当し、「み」は-ityに相当すると従来の研究では見なされてきた。しかしながら、語数の多少ではなくて、アクセントの移動という観点からすれば、「さ」と「み」は-nessや-ityとはかなり異なる特徴を示すので、より詳しく検討してみる必要があった。

(3) 混成語は、複合語や派生語に比べて、辞書に採録されている例が少ないことなどもあって、あまり多くの研究はなされてこなかった。しかしながら、混成語を生み出す制約や条件にも大変興味深い面があり、より詳しく考察していく価値があった。

(4) 英語等からの借用語に見られる音変化や短縮形の作り方を調べることで、日英語の音韻構造の異同がさらに明らかになると思われる。

2. 研究の目的

本研究では、語形成の行われるレキシコン(語彙部門)・形態部門はどのような構造と役割を持ち、それらは文法の他の部門とどのように関わり合い、そしてそこではどのような仕組みや原理・制約が働き、また、ヒトは語の部品の何を記憶し、何を規則によって作り出しているのかといったことなどを、日英語の様々な語形成過程を分析しながら、明らかにしていく。

3. 研究の方法

ほぼ毎週開かれる山口大学英語学研究会、及び、ほぼ毎月開かれる関西音韻論研究にできるだけ出席し、他の参加者から新しいアイデアを吸収すると同時に、自身も精力的に研究発表を行って、様々なコメントや批評・批判を仰ぐようにする。また、所属する学会の大会や国内で開かれる国際会議でも研究発表を行うように努め、自身の論考を精巧なものへと練り上げ、学会誌等に投稿する。さら

に、海外で開かれる国際会議等にも参加して、世界的な研究動向・成果を掴み、自身の研究の推進に役立てる。

4. 研究成果

(1) まず、複合語に関しては、固有名詞(名字)の連濁とアクセントの有無について調べた。例えば、「谷川」が「たにかわ」と「に」にアクセントをつけて読まれる場合には連濁が起こらないが、「たにがわ」と平板型(無アクセント)で読まれると連濁することなどから、アクセントと連濁はなるべく共起しない(どちらかがあればよい)関係になっていることを論じ、論文集の一部として出版した(図書)。しかしながら、2拍名詞と2拍名詞を組み合わせて合計4拍にした普通名詞の複合語(例えば「山鳥」など)をつぶさに調べ、かつ、無意味語・新造語を用いた実験も行ってみると、必ずしも、連濁とアクセントのどちらか一方だけが選ばれる関係になっておらず、両方とも現れる場合や、どちらも現れない場合も多いことが分かった。(この後者の研究成果は、『連濁事典』(仮称)の1章として出版予定である。)

(2) 連濁に関連して、その分類基準についても新しい提案を行った。従来の研究では、100%を単純に3分割して、66%以上の例で連濁を示すものは連濁を好む語で、33%以下の例でしか連濁が見られなければ連濁を嫌う語という分類がなされてきた。こうした恣意的な数値を用いた議論に反対し、国立国語研究所の「連濁データベース」に挙げられている例を、より厳密な統計的手法で再分析し、連濁しやすいグループとしにくいグループはどこで線引きをすべきかを、品詞別に示し、論文にまとめた(雑誌論文)。

(3) 複合語のアクセントに関しては、主に日本語の漢語複合語のアクセント型に注目して論じた。英語の複合語は、blackboardのように前半要素により強い強勢が置かれるのに対して、日本語の複合語は、「こくごじてん(国語辞典)」のように後半要素にアクセントが与えられるのが標準的とされてきた。ところが、例えば「憲法改正」では、前半要素にアクセントがある。この例では、後半要素の元となった動詞「改正する」からすれば、前半要素の「憲法」は、その動作の主題(theme)であるという関係になっている。そこで、ある動作等が成り立つために必要な項目(主体や対象)が前半要素として組み込まれた複合語は、単に前半要素が後半要素を修飾するタイプの複合語とは異なるアクセント型をとるのではないかと予測できる。このことを確認するために、アクセント辞典から類例をもれなく抽出した。そして、一見不規則なアクセント型が生じる理由を推察した(雑誌論文)。

(4) 派生語の研究では、主に、名詞を作る接尾辞である英語の -ness, -ity と日本語の「さ」、「み」を対照させて考察した。従来の研究では、生産性の違いに基づいて、「さ」は -ness に対応し、「み」は -ity に対応するとされてきた。しかしながら、-ity はアクセントを移動させても、-ness はアクセントの位置にまったく影響を与えないのに対して、「さ」と「み」は両方ともアクセントの位置を変化させうる。よって、語彙部門の中で、-ness と -ity に対して与えられる配置と同じものを「さ」と「み」に与えるわけにはいかない。さらに、「み」がどの形容詞に付加されるかを予測することはできないので、「み」が付加された語は、そのまま記憶されているものと推察できる。よって、日本語の語彙部門は、派生語に関して、記憶された項目の領域と規則によって生み出す項目の領域に大きく分かれ、かつ、生産性の高い「さ」のつく語もアクセント規則の適用を受けるように接辞が配置されている、という構成になっていることを論じた。(この論考は『窪蘭先生還暦記念論文集』(仮称)に掲載予定である。)

(5) 混成語の研究では、「2つの原語のうち、右側の原語の長さに合わせて混成語が作られる」という長さの制約に違反する例について主に考察した。この長さの制約に反する例の特徴・条件は、「テレビ+ビデオ テレビデオ」のように、前半要素の終わり後半要素のはじめに同音が含まれていることである。この条件は、英語の混成語にも当てはまる。そして、ここでは、いわゆる駄洒落を作るときに働く心理(「せっかく同じ音が含まれているので、それをなんとか生かそう」という気持ち)と同じものが働いているといえるので、「駄洒落混成」と名づけて論じた。(この論考は日本音韻論学会の20周年記念論文集の一部として出版予定である。)

(6) 借用語の研究では、主に、その短縮形を作る際の原則について考察して、論文にまとめた。この原則の要点は「競争相手がなくなるまで長くせよ」である。短縮形・省略語は、できれば短いほどよい。しかしながら、あまりに短すぎると、他の語との区別が難しくなる。例えば、「テレビジョン」を「テレ」としたのは、「テレスコープ」や「テレパシー」など他の語の可能性もあり、同定できない。そこで「テレビ」と3拍まで残せば、他の語と区別ができないということはなくなり、「テレビジョン」だということが分かる。そして英語でも、例えば information を in ではなく info と略す場合などの説明に、同じ原則が適用可能である(雑誌論文)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

太田 聡、日本語複合語の不規則なアクセント型についての予備的考察、山口大学文学会志、査読無、Vol. 66、2016、pp. 89-99.

太田 聡、太田 真理、連濁の生起率に基づく日本語複合語の分類 連濁データベースによる研究、国立国語研究所論集、査読有、Vol. 10、2016、pp. 179-191.

太田 聡、短縮語形成管見、異文化研究、査読無、Vol. 8、2014、pp. 63-80.

Satoshi Ohta, Subsidiary Stresses in English (E. Yamada), *English Linguistics*, 査読有、Vol. 30, No. 1, 2013, pp. 358-368.

〔学会発表〕(計 6件)

太田 真理、太田 聡、連濁に前部要素の音韻的特徴が与える影響：連濁データベースを利用した研究、第6回コーパス日本語ワークショップ、2014年9月10日、国立国語研究所(東京都立川市) Shinri Ohta, Satoshi Ohta Rendaku “Enthusiasts” and Rendaku “Indifferents”: Classification of Compound Nouns Based on the Frequency of Rendaku, 3rd International Conference on Phonetics and Phonology, 2013年12月21日、国立国語研究所(東京都立川市)

太田 聡、略語の仕組みをめぐって、東京音韻論研究会、2013年4月20日、東京大学駒場キャンパス(東京都目黒区)

〔図書〕(計 1件)

Jeroen van de Weijer, Tetsuo Nishihara, Satoshi Ohta 他、Kaitakusha, *Current Issues in Japanese Phonology: Segmental Variation in Japanese*, 2013, 63-87.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 聡 (Satoshi Ohta)

山口大学・人文学部・教授

研究者番号： 40194162

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：